

「教職実践演習（栄養教諭）」の実践と

「履修カルテ」活用の効果

Implementation of Practical Seminars for Teachers (Nutrition)

and the Use and Impact of “Rishu Karte”

新井英志¹⁾

Hideshi ARAI

百々瀬 いづみ²⁾

Izumi MOMOSE

山部 秀子³⁾

Shyuuko YAMABE

要旨

本稿では、T大学における「教職実践演習（栄養教諭）」の実践と「履修カルテ」活用の効果について、実践内容とともに、検証した結果を報告する。研究対象は、2016年度の卒業生14名である。研究方法は、本授業終了後のアンケート（質問紙調査で5件法と記述を併用）と「履修カルテ」の自己評価結果や記述内容を活用して、カテゴリ分析と統計解析を行った。本授業における3つの授業目標の達成度は、学生による自己評価の平均値が4.14～4.00（5件法）であり、これらの目標は概ね達成したと評価した。次に、本授業が教員としての資質能力向上に役立っているかについては、学生の回答内容から判断して、効果があったと評価した。また、学生の回答による「履修カルテ」を作成した効果については、「学年ごとの自己評価で成長を実感」が57%、「学修履歴の記録に役立った」が50%、「達成すべき目標が明確になった」「教員としての力量・実践力の向上に役立った」が共に29%の順であった。さらに、「履修カルテ」を本授業で活用する効果については、考案した「履修カルテ」の振り返りシートが、学びの振り返り・省察の手助けをすることや、学生自身の教員としての課題の明確化と、それを克服するための具体的な実践目標決定の有効なツールとして効果的であった。

This paper reports the implementation of practical seminars for teachers at T College. Furthermore, the details of this implementation are outlined, and the results of the use and impact of “Rishu Karte” (academic portfolio for college students aiming to be teachers) are examined. In total, 14 alumni who graduated in 2016 participated in the study. The method employed included a questionnaire administered after completing a class (with questions answered on a five-point scale combined with descriptors), as well as the results from a self-assessment of “Rishu Karte,” and a category analysis and statistical analysis of these results.

The self-assessments done by students revealed that the achievement of three class objectives averaged between 4.14 and 4.00 (on a five-point scale), indicating that these objectives were

1) 天使大学看護栄養学部教養教育科

(2017年6月29日受稿、2017年9月28日審査終了受理)

2) 札幌保健医療大学保健医療学部栄養学科（2016年度まで3）に所属

3) 天使大学看護栄養学部栄養学科

generally achieved. Thereafter, the responses of students were evaluated to determine whether the class was useful for improving teaching skills, and the class was assessed as having an impact. In addition, with regard to the impact of creating “Rishu Karte,” 57% of the students responded, “I feel I grew in each year’s self-assessment” ; 50% responded, “It was useful as a record on my student CV” ; and 29% responded, “It was useful in improving my competence and capabilities as a teacher.” Moreover, with regard to the impact of using “Rishu Karte” in this class, the reflection sheet of “Rishu Karte” considered in the class had an impact as a useful tool for assisting in reflecting back on what was learned, clarifying issues as teachers of the students themselves, and setting specific goals in practice.

キーワード：履修カルテ：“Rishu Karte” (academic portfolio for college students aiming to be teachers)

教職実践演習：the practical seminar for teaching profession

栄養教諭養成教職課程：Teacher-training course for nutrition instructors

I. はじめに

「教職実践演習」は、教職課程において4年次後期に開講される最終必修科目である。「教職実践演習」のはじまりは、2006年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成－免許制度の在り方について」¹⁾にさかのぼる。この答申を受け、「教職実践演習」は、2008年11月の「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」により、2010年度以降の教職課程における「教職に関する科目」の一つとして新設された。「教職実践演習(仮称)について」²⁾によると、その趣旨・ねらいは、学生が教職課程の内外で身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合・形成されたかについて、最終的に確認するものであり、「教職実践演習」は、いわば全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」として位置付けられている。

このため、「教職実践演習」には、教員として求められる4つの事項(表1)を含めることが適当²⁾とされるとともに、9項目の授業内容例なども示された。さらに、課程認定委員会が定めた「教職実践演習の実施に当たっての留意事項」³⁾(以下、「留意事項」)では、「教職実践演習の進め方およびカリキュラムの例(栄養教諭)」において、授業で扱う内容・方法例も示された(表2)。

また、「教職実践演習」の履修に際して作成が必要となる「履修カルテ」については、2008年10月に課程認定委員会・文部科学省が、様式や活用方法を例示した⁴⁾。これらに基づき、本学はじめ全国の各大学では、2010年度入学生から「履修カルテ」を作成・記入させるとともに、2013年度後期からは、「教職実践演習」が開講された。

本学においても2016年度末現在で、「履修カルテ」作成開始から7年間、「教職実践演習」開講から4年間の経過した。この間、本学では、「教職実践演習」の内容充実と「履修カルテ」の効果的運用を模索した。しかし、栄養教諭一種免許状の取得を目的とする本学の「教職実践演習」を改善す

表1. 「教職実践演習」に含める4つの事項

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項 ②社会性や対人関係能力に関する事項 ③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項 ④教科・保育内容等の指導力に関する事項 |
|--|

※ 文献2)より転載した。

表2. 授業で扱う内容・方法例(栄養教諭)

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ①イントロダクション・これまでの学修の振り返りについての講義・グループ討論 ②教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責任等についてのグループ討論・ロールプレイング ③社会性や対人関係能力(組織の一員としての自覚、保護者や地域の関係者との人間関係の構築等)についての講義・グループ討論 ④幼児児童生徒理解や食に関する課題についての講義・グループ討論 ⑤学校現場(共同調理場を含む。)の見学・調査 ⑥社会性、対人関係能力、幼児児童生徒理解についてのグループ討論 ⑦学校給食管理についての講義・グループ討論 ⑧食に関する指導力についての講義・グループ討論 ⑨校内の教職員や家庭、地域との連携のためのコーディネートについてのグループ討論 ⑩模擬授業 ⑪資質能力の確認、まとめ |
|--|

※ 文献3)より転載した。

るために参考となる論文を見出すことは難しかった。さらに、「教職実践演習」で指導に活用することが求められている「履修カルテ」であるが、本学で2015年度に「履修カルテ」の見直しに着手した当時、「履修カルテ」がどのように工夫され、運用がされているかを示すデータや論文はほとんど見当たらなかった⁵⁾が、2017年4月においても現状はさほど改善されていない。

以上のことから、本研究では、本学における「教職実践演習(栄養教諭)」と「履修カルテ」の実践の概要を示した上で、本授業が学生にとってどの

ような効果を上げているのか、「履修カルテ」の効果はどのようなものであったかを分析・検証するとともに、今後の授業改善のための課題を明らかにすることを目的とした。

本論は、次の9つの部分からなる。

II. 先行研究 III. 研究課題 IV. 研究方法
V. 「教職実践演習」の実践 VI. 「履修カルテ」の活用
VII. 結果 VIII. 考察 IX. まとめ
X. 今後の課題

II. 先行研究

「教職実践演習」の研究は、年々、増加傾向にある。長谷川（2015）は、教育学部の「教職実践演習」の成果と課題を学生アンケート結果から分析し、授業内容や授業方法で学生の評価が高かった反面、「教職履修カルテ」の記入などについては、評価が低かったことを明らかにした⁶⁾。一方、國原（2016）は、「教職実践演習」では、表1に示した「4つの事項を統合して形成されたかの確認が求められているが、実践研究を見る限り、これらの事項の関連性や統合が実証的には示されていない⁷⁾と述べている。

また、「教職実践演習」における「履修カルテ」の活用事例も多いとは言えない。梅津と近藤（2014）は、講義の第7・8回で、「履修カルテを基に、各自の学びをふりかえり、グループごとに交流し、それをもとに履修カルテの今年度分および全体総括を記述する準備を行なう（原文のまま）」⁸⁾としている。中島ら（2014）は、「履修カルテ」の活用事例として、講義の第2回で、「学習ポートフォリオ」（「履修カルテ」）を利用して、教職課程の振り返りのためのディスカッションをさせ、それを踏まえて第3回でレポート課題を出させ、教員が個別指導を行った事例を紹介している⁹⁾。川村学園女子大学（2015）では、「教職実践演習」において、当該の授業内容を「履修カルテ」にファイルできるようワークシートを作成し、学生間

での討論、情報交換の資料として活用していることを報告した¹⁰⁾。

さらに、前述したように、「教職実践演習」と「栄養教諭」を含む大学の論文は極めて少ない。大学では、笹原ら（2014）が、「中・高、栄養教諭部会」のくくりで授業報告をしているが、栄養については、3回の授業実践の紹介にとどまり、成果について定量的な評価の記載はない¹¹⁾。

大学より2年早く「教職実践演習」を開始した短期大学では、報告数が少し増加する。中島ら（2015）は、8名の学生を対象として、「教職履修カルテ」に記載された7領域の自己評価を中心とする量的分析と、学生の課題意識、最終レポートなどの提出物による質的分析を実施し、学生の「授業実践力」「子ども理解」が有意に向上したことを報告した¹²⁾。木村ら（2015）は、18名の学生を対象として、「到達目標の作成」およびその「成績評価の方法」を通じて、栄養教諭としての実践的指導力を確実に身につけさせる実践を報告した¹³⁾。

III. 研究方法

前述した現状を踏まえ、次の3点を研究課題として設定した。

- 1) 「教職実践演習」は、授業の目標を達成しており、学生にとって、教員としての資質能力向上に役立ったか。
- 2) 「履修カルテ」の作成は、学生にとって、教員としての資質能力向上に役立ったか。
- 3) 「履修カルテ」を「教職実践演習」で活用することは、学生にとって、教員としての資質能力向上に効果的であるか。

IV. 研究方法

1. 調査対象

調査対象は、2016年度に「教職実践演習（栄養教諭）」を履修したT大学栄養学科・教職課程の4

年次生のうち、研究参加に同意した14名とした。

2. 調査方法

対象の学生が2016年6月～2017年1月に記述・評価した次の内容を分析して検証した。①教育実習(2016年5月23日～6月2日)後の総括(学生レポート)の自由記述、②最終授業後のアンケート(質問紙調査で5件法と記述を併用、2017年1月10日実施)の記述内容、③「履修カルテ」の自己評価結果と記述内容、である。なお、③「履修カルテ」については、2年次からの記述内容も参考にした。

また、記述内容については、筆者によるカテゴリ分析を行い、「履修カルテ」の統計解析には、Excel 2010(Ver. 14.0.7166.5000)を使用した。

3. 倫理的配慮等

本研究は、本学研究倫理委員会の承認(受付番号2016-26)を受けた。承認時の委員会の指示により、2017年1月10日に、研究対象者に口頭および文書で研究協力を依頼し、承諾書の受理をもって研究参加の同意とみなした。さらに、教職課程委員会から、データ使用について許可を受けた。

V. 「教職実践演習」の実践

1. 「教職実践演習」のねらい・目標・構成

本学の「教職実践演習(栄養教諭)」は、前述した「教職実践演習(仮称)について」²⁾のねらい・目標や「留意事項」³⁾の内容・方法例とともに、「教育職員免許法施行規則」(2008年11月改正)を踏まえて構成した。同規則によると、「教職実践演習」は、「当該演習を履修する者の教科に関する科目及び教職に関する科目(教職実践演習を除く。)の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するものとする」と定められている。本学の「教職実践演習」においても、これまでの教職課程で学んだ理論と実践の有機的な統

合を図ることを目的に、「履修カルテ」を活用した事例(課題)研究、学校現場の栄養教諭による講義、栄養教育の実践等を含めて構成した(表3、表4)。

また、シラバスで示した授業の目標は、表1を踏まえ、次の3点とした。①教員としての使命感や責任感、社会性や対人関係能力について理解する。②児童・生徒理解の重要性や学級経営力について理解する。③教科内容の指導力等について自ら確認し、何が課題であるかを自覚し、主体的にその解決に向けて取り組むことが出来る。

2. 2013年度～2016年度の変遷

2013年度～2016年度の「教職実践演習」の変遷概要については、表1と表2の関連とともに、表3にまとめた。

授業開講年度の2013年度は、札幌市農業体験交流施設「サッポロさとらんど」や札幌市児童会館等の協力をいただき、小学生とその親を対象とした調理実習や栄養教育を実践の一つの柱とした。その後、本授業における4年次生の栄養教育の実践状況を教職課程履修の後輩(3年次生)に観察してもらうことで、お互いの資質向上を図ることができるのではないかと考えた。

そこで、2014年度からは、3年次生対象の本学独自の選択科目である「教職総合演習」の一部を、4年次生対象の「教職実践演習」の一部と同時間帯に実施する変更を行った。これは、ピア・エデュケーション(仲間教育)によるグループダイナミクス効果を期待したことによる。

さらに、2015年度からは、札幌市児童会館での栄養教育は中止した。これは、学生の授業評価アンケート結果や学生の知識技術の獲得状況を踏まえ、取り組み課題が多すぎると1つ1つの完成度が低くなり、消化不良になりかねないとの反省による。その代わりに、「サッポロさとらんど」での栄養教育の準備・練習時間、実施時間の増大と、学生が児童役となるロールプレイングによる栄養教

表 3. 「教職実践演習」の変遷概要（2013～2016 年度）

項目	授業テーマ・方法	内容・方法等	年度別授業実施回数 (※1)			表 1 ①～④ との関連	表 2 ①～⑩ との関連
			2013	2014	2015-2016		
1	「教職実践演習」ガイダンス	授業の目的、授業内容と方法の確認	1	1	1	①、④	①
2	グループ討議 ・学習指導 ・生徒指導	・栄養教育実習で学んだ事例等を出し合い、積極的に討論する。 ・各自の教育実習後の課題を確認する。	2	2	2	①、② ③、④	①、②、③ ④、⑥
3	学校現場の栄養教諭による特別講義	・年間指導計画の作成方法と活用について ・特別支援学校の実際について	2	2	2	①、② ③、④	②、③、⑦ ⑧、⑨
4	演習「年間指導計画の作成と活用」	・講義で学んだ年間指導計画を討論しながらグループごとの計画を作成する。 ・作成した年間指導計画に基づき、栄養教育を企画し、給食だよりと学習指導案を作成し、実際に模擬栄養教育を行う。	2	2	2	①、②、④	④、⑦ ⑧、⑩
5	栄養教諭ロールプレイング	年間指導計画をもとに企画した栄養教育を学生同士で行い、評価し、課題を発見する。	—	—	2(1)	③、④	④、⑧
6	栄養教育の実践	教育委員会の協力をいただき、栄養教育の場として紹介してもらったイベント会場において来場児童を対象とした栄養教育を実践し、知識と技能等を補う。(※2)	4(3)	4(3)	6(4)	①、② ③、④	④、⑧、⑩
		児童会館の協力をいただき、児童会館来館児童を対象とした栄養教育を実践し、知識と技能等を補う。	4(2)	4(2)	—	①、② ③、④	④、⑧、⑩

※1 数字は回数、—：未実施、()内の数字：準備回数(再掲)である。

※2 2014年度以降は、同じ会場で3年次生も栄養教育を実施している。

表 4. 2016 年度「教職実践演習」の授業内容（概要）

回	実施日	授業内容（概要）	表 1 ①～④ との関連	表 2 ①～⑩ との関連
1	7月6日	授業ガイダンス（科目の趣旨・ねらい） 栄養教育の計画・討論	①、④	① ⑧
2	7月13日	教育実習で得た事例（課題）の検討Ⅰ （「履修カルテ」を活用した教科指導の分析）	①、② ③、④	①、②、③
3	7月20日	教育実習で得た事例（課題）の検討Ⅱ （「履修カルテ」を活用した生徒指導の分析） 「履修カルテ」振り返りシートの説明と記入・提出の指示	①、② ③、④	①、② ④、⑥
4～5	9月29日	栄養教育の計画・準備（調理実習内容の試作）	①、②、④	④、⑧
6	10月6日	栄養教育の計画・準備（レシピ・栄養教育教材の作成Ⅰ）		④、⑧
7	10月13日	栄養教育の計画・準備（レシピ・栄養教育教材の作成Ⅱ）		④、⑧
8	10月20日	栄養教育の模擬発表（含むレシピ・栄養教育教材の確認・修正）		④、⑧、⑩
9～10	10月22日	栄養教育の実践（会場：サッポロさとらんど）	①、②、③ ④	⑩
11	11月10日	栄養教諭による講義Ⅰ 「年間指導計画と食に関する指導の実際」	①、② ③、④	②、③、⑦ ⑧、⑨
12	11月17日	年間指導計画の立案、給食だより作成	①、②、④	④、⑦、⑧
13	11月24日	年間指導計画と給食だよりを活用した栄養教育の計画、学習指導案と指導教材の作成・準備、栄養教諭ロールプレイング		②、④ ⑦、⑧
14	12月1日	年間指導計画と給食だよりを活用した模擬栄養教育の実践、栄養教諭ロールプレイング		②、④、⑦ ⑧、⑩
15	1月10日	栄養教諭による講義Ⅱ 「特別支援学校における食に関する指導の実際」 授業のまとめ・「履修カルテ」を活用した評価・アンケート等記入	①、② ③、④	②、③、⑦ ⑧、⑨、⑩

育とその評価のための討論時間を増加させるよう変更して、現在に至っている。

3年次生対象の「教職総合演習」と4年次生対象の「教職実践演習」をコラボレーションさせる取り組みは、4年次生が行う栄養教育を3年次生が観察できるだけでなく、3年次生の栄養教育や作成教材を4年次生が観察できるため、両学年にとって利点が多いと考えている。3年次生からは、「来年度自分たちが行う栄養教育の方法を具体的にイメージできた」「1年後の自分の目標が見つかった」などの前向きな意見が聞こえている。また、4年次生にとっても「後輩が作成した教材には自分たちには無かったアイデアを含有していて参考になった」など、両学年にとって、有意義な内容になっている。

3. 2016年度の実践内容

1) 2016年度の授業内容(概要)

2016年度の授業内容(概要)については、表1と表2の関連とともに、表4にまとめた。教職課程で学んだ理論と実践の有機的な統合を図るために、講義のほかに「事例研究」「年間指導計画の立案や教材研究」「栄養教育の実践」等を実施している。また、表1と表2との関連性も高くなるよう授業を構成し、本授業のねらいを確実に達成できるよう計画・実施した。

2) 主な活動紹介

表4における特徴的な3つの授業内容を具体的に記す。

(1)「サッポロさとらんど」における栄養教育の実践

「サッポロさとらんど」では毎年10月に「新米フェア」という新米を紹介するイベントを開催している。そのイベントの会場と時間を一部借用し、「教職実践演習」の一環として学生が2グループに分かれ、栄養教育を実践している。一方のグループの内容は、「新米シェフになろう～新米に合うおかずのクッキング」として、小学生の親子ペアに

昼食1食分の調理実習の指導を行うことである。メインディッシュを「豚肉のしょうが焼き」など、ご飯がおいしく食べられるような味付けの主菜とし、その他のおかずには汁物、副菜、デザートを合わせた計4品1食分の献立を考案している。数度の試作を行い、模擬練習を重ね、本番では親子に調理方法を伝えている。調理の合間または食後に、米やご飯に関する講話やクイズを行うことも課題の1つである。

他方のグループの内容は、ご飯を使い、短時間に小学生1人でも出来る料理1品を実習してもらうことである。「デコおむすび」などの名前を付け、おむすびの上に、おいしくかわいらしく具を飾るなど、目からもおいしくご飯を食べてもらう工夫をしている。展開方法は、デモンストレーションにより作り方を指導した後、小学生やその親たちが作る調理の補助を行っている。

これら栄養教育の実践とともに、3年次生の「教職総合演習」履修者が、当日、同会場で行う栄養教育を観察することも授業内容の1つである。3年次生は、3～4チームに分かれ、米やご飯に関する「栄養の話」、「米を使った日本の行事食」、「世界の米料理」など1チーム15分程度の栄養教育を行っている。また、その栄養教育に使う教材は、栄養教育を行う時間帯以外は、「新米フェア」の会場内に展示し、栄養教育を直接聞けない時間帯の来場者にも見てもらうようにしている。

(2)年間指導計画作成、給食だより作成と、それらを活用した栄養教育指導(模擬授業)

本学の卒業生であり、北海道で勤務している栄養教諭を特別講師として招き、講義の中で年間指導計画の作成方法やその活用方法を具体的に紹介してもらっている。学生は講義を受けた後、4グループに分かれ演習に取り組む。まず、栄養教諭になったつもりで年間指導計画案を作成する。次に、春夏秋冬の4つの季節を1グループごとに担当し、年間指導計画に沿った1回分の給食だよりを作成するとともに、それに関連する内容の栄養

教育を企画する。さらに、学習指導案と指導教材も作成・準備して、学生を児童に見立てた模擬栄養教育を行う。栄養教育終了後は、良かった点、改善すべき点等を全体で熱心に議論する。ねらいは、自分がこの内容で再度行うのであれば、どのように工夫・改善すべきかを検討するとともに、栄養教諭としての自分自身を省察させ、実践的指導力を高めることにある。

(3) 特別支援学校における栄養教育の実際を学ぶ

本学の卒業生であり、北海道内の特別支援学校で勤務している栄養教諭を特別講師として招き実施している。講義内容は、学生へ特別支援学校における栄養教諭業務の実際(内容、やりがい、大変さ等)を伝えるだけでなく、先輩として後輩たちへの手本を示し、応援メッセージも込めてもらうことで、キャリア支援の一翼も担っている。

VI. 「履修カルテ」の活用

1. 「履修カルテ」の改善

1) 「履修カルテ」の様式の概要と工夫

「履修カルテ」の様式は、文部科学省の例示⁴⁾を参考にして教職課程委員会で作成し、2010年度入学生から記入させていた。2015年度に改善に着手し、2016年度からは次のような内容構成とした。

<履修カルテ I> 教職関連科目の履修状況等

- ・履修した科目・実習等で学んだ成果と課題を記録、教員としての資質能力向上に活用

1. 教職関連科目の履修状況一覧

2. 教職に関する学外実習(北大農場実習・インターンシップ)・ボランティアの状況
3. その他、教職に一部関連すると思われる学内・学外の活動
4. 主な教職関連科目の履修記録
5. 教育実習の記録

<履修カルテ II> 自己評価シート

- ・自己評価を通して自己理解と課題発見を行い、教員としての資質能力向上に活用

1. 自己を理解する(1年次)
2. 自己評価をして、教職を目指す上で課題と考えている事項(2・3年次)
3. 自己評価シート(2・3年次用)
4. 自己評価シート(4年次用) 振り返りシート

改善の特徴としては、①「教職実践演習」での活用を一層図るため、「<履修カルテ II> 4. 自己評価シート(4年次用) 振り返りシート」(以下、「振り返りシート」)を加えたこと。②「履修カルテ」全体を通して、学生が自らの成長や課題を一層省察できるようにしたこと、③各年度ごとの教員による確認を明確化したこと。④ファイルの保管は学生に責任を持たせたこと、である。これら改善の背景としては、「履修カルテ」を実際に運用した結果に基づく反省と、「履修カルテ」利用の充実を図るねらいがあった。

2) 「履修カルテ」の運用方法

「履修カルテ」は、表紙を除き17ページからなる紙ファイルである。表5に「履修カルテ」の記入・提出・確認等の時期を示した。1年次前期末にガイダンスを行い配布、記入を開始する。各学

表5. 「履修カルテ」の記入・提出・確認等の時期

	1年次	2年次	3年次	4年次
前期始：4月		履修カルテ返却	履修カルテ返却	履修カルテ返却
前期末：7月	履修カルテ説明・作成・記入	履修カルテ記入	履修カルテ記入	履修カルテ記入・評価・提出→確認
後期始～中：9月～12月			履修カルテ記入・評価・提出→個人面接・確認(11月～12月)	履修カルテ返却(9月)
後期末：1月	履修カルテ記入・提出→確認	履修カルテ記入・評価・提出→確認	履修カルテ記入・提出→確認	履修カルテ記入・提出→確認→返却

年とも後期末の1月に記入の確認のため提出させ、記入が不十分な場合には、指導して再提出させている。そして、2年次以降は毎年4月に学生に返却して、学生はその年度の記入を行う。

2. 「履修カルテ」の活用

「履修カルテ」の活用方法についても文部科学省が例示している⁴⁾。本学として重要と考えた、

1) 学生指導での活用、2) 「教職実践演習」での活用、について次に具体例を示す。

1) 学生指導での活用

(1) 1～4年次末に学生が記入・提出した「履修

カルテ」を、専任教員が点検・確認し、不十分な場合の修正指導を行ったり、悩み等に対し助言を行っている。

(2) 3年次の11月～12月に「履修カルテ」の自己評価結果を提出させ、その評価票に基づき、2名の専任教員による個人面接を実施し、教職課程での学びの確認や進路について指導・助言を行っている。

2) 「教職実践演習」での活用

「履修カルテ」を「教職実践演習」で積極的に活用するため、A4判の振り返りシート(図1)を作成・活用した。学生は、4年次前期の教育実習後

に開講される7月の「教職実践演習」の中で、「履修カルテ」も活用して教科指導と生徒指導の分析を行う。その後、振り返りシートを使って小項目ごとに4年次の自己評価を行い、大項目ごとに今後の課題を記入する。さらに、「教職実践演習」を通して向上すべき資質能力と、そのための具体的な実践目標を設定し提出する。9月には教員がコメントを記入したシートを返却し、それ以降の講義の中で学生は目標達成を意識して授業に取り組むことになる。

また、1月の授業最終回では、振り返りシートを活用して、各自が立てた目標についての達成度を自己評価して省察するとともに、授業全体のまとめを行っている。

Ⅶ. 結果

1. 教育実習後の総括から見える学びと「教職実践演習」における課題設定の状況

1) 教育実習後の総括から見える学生の学び

「履修カルテ」の中に記録として綴って

天使大学教職課程 履修カルテⅡ-2<自己評価シート> 振り返りシート				[実施日: 年 月 日]	
看護栄養学部 栄養学科 学籍番号: _____ 氏名: _____					
必要資質能力についての自己評価		必要資質能力の指標		自己評価	
		(評価基準: 1:不十分 3:普通 5:十分)		※◆の欄を記入すること ◆今後の課題	
項目	項目	指標の具体例	3年次	4年次	
学校教育についての理解	教職の意義	教師としての使命感を理解し、教員の役割と職務内容について知っている	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	教育の理念・教育史・思想の理解	教育の理念・歴史・思想について調べたり、それらに関する書物を読んだりしている	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
子どもについての理解	学校教育の社会的・制度的・経済的・心理的・発達論的な子ども理解	・教育基本法と教育三法(学校教育法など)の主な内容を知っている ・中央教育審議会の主な委員等の内容を知っている	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	学習集団の形成	・子どもの発達に関するピアジェやピアゴワキ等の代表的な理論を知っている	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
他者との協力	子どもの状況に応じた対応	・学習集団形成に必要な基礎理論・知識を習得している	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	他者意見の受容	・発達段階に応じた配慮、児童・生徒を理解することができる ・特別支援教育の意義や理念について知っている	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	保護者・地域との連携協力	・学習指導要領など他者の指導や助言を素直に受け入れ、課題に取り組みることができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	他者との連携・協力	・保護者・地域との連携が必要な場面を具体例を知っている ・保護者と積極的に関わることの意義を知っている	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
コミュニケーション	役割遂行	・他者と共同して授業を企画・運営・展開することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	発達段階に対応したコミュニケーション	・学習指導要領において積極的に指導教員の補助ができる ・教員間で児童・生徒の情報を共有し、協力し課題に取り組みることができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	子どもに対する態度	・場面において、率先して自らの役割を見つたり、与えられた役割をきちんとこなすことができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	公平・受容的態度	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
教科・教育課程に関する基礎知識・技能	社会人としての基本	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	教科(栄養教育)	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	教科書・学習指導要領	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	教育課程の構成に関する基礎知識・技能	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
教育実践	情報機器の活用	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	教材分析能力	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	授業構想力	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	教材開発力	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	授業展開力	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	表現技術	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	授業研究	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
課題探求	学級・ホームルーム運営能力	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
	課題認識と探究心	・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる ・児童・生徒の発達段階を考慮して、適切に接することができる	1-2-3-4-5	1-2-3-4-5	
◆「教職実践演習」を通して向上すべき資質・能力					
◆ 同上における具体的な実践目標					担当教員から◇

図1. 「履修カルテ」の振り返りシート

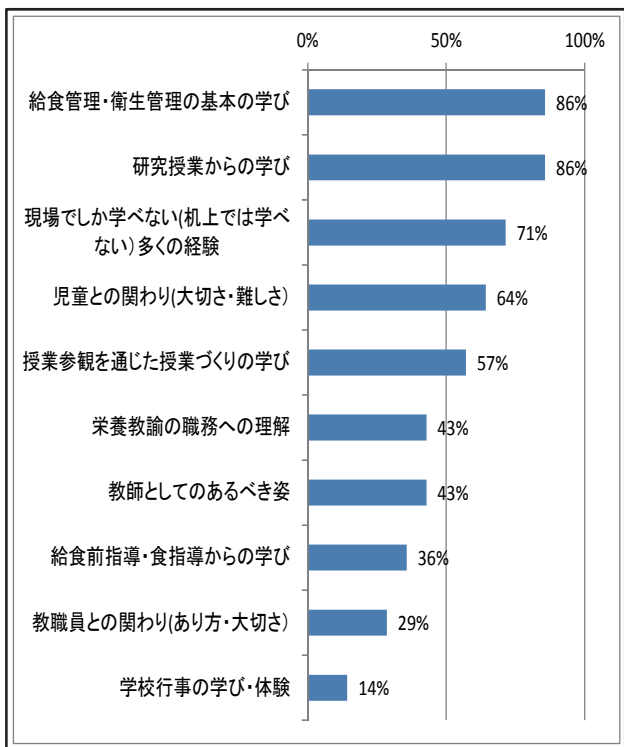


図 2. 栄養教育実習の総括 (n=14)

※ 自由記載からカテゴリー化 (複数回答)

ある栄養教育実習に関する総括 (自由記載) の中から、キーワードを拾って集計した結果を図 2 に示した。「研究授業からの学び」と「給食管理・衛生管理の基本の学び」が同率で第 1 位となり、次いで、机上では学ぶことができなかった「現場でしか学べない多くの経験」や「児童との関わり」などが記載されていた。このことから、教育実習が、学生にとって有意義な学びの場であったことや、学生自身の課題を再認識できた場であったことがうかがえる。

2) 「教職実践演習」における課題設定の状況

本授業における課題設定については、図 1 の振り返りシートを活用した。2016 年 7 月 20 日の第 3 回の授業では、図 1 の振り返りシートの活用方法等について説明し、本授業における各自の課題を設定・記載し、提出するよう指導した。各自の課題としては、(1)「教職実践演習」を通して向上すべき資質能力、および(2)「教職実践演習」における具体的な実践目標の 2 項目である。その記載内容のキーワード (複数回答) についてカテゴリー化

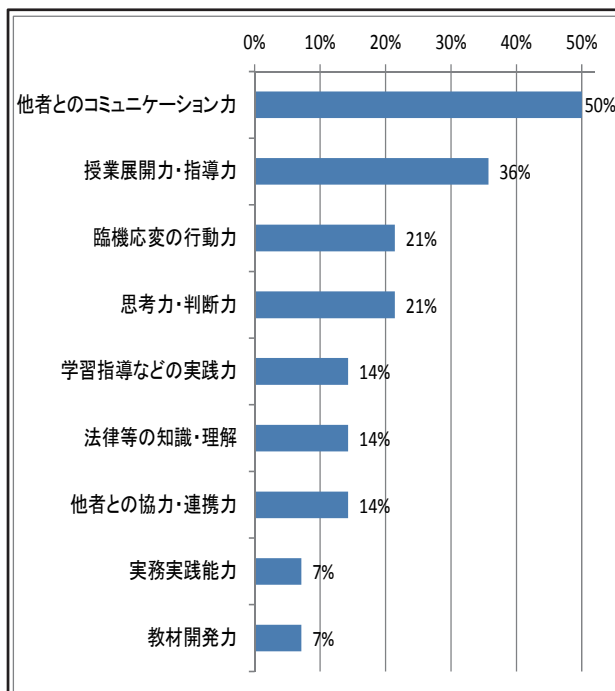


図 3. 「教職実践演習」を通して向上すべき資質・能力 (n=14)

※ 記載内容からカテゴリー化 (複数回答)

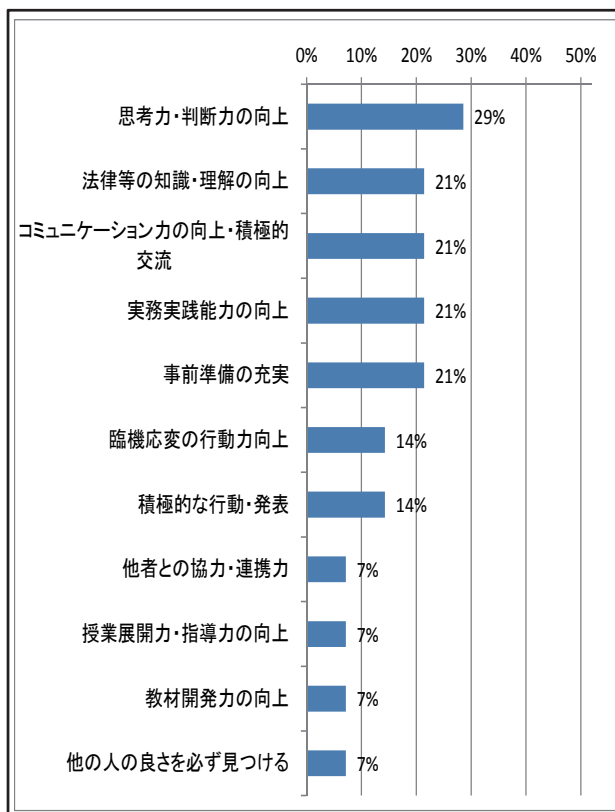


図 4. 「教職実践演習」における具体的な実践目標 (n=14)

※ 記載内容からカテゴリー化 (複数回答)

一分析を行い、(1)の結果を図3に、(2)の結果を図4に示した。

(1)「教職実践演習」を通して向上すべき資質能力では、第1位が「他者とのコミュニケーション力」の50%、第2位が「授業展開力・指導力」の36%、第3位が「臨機応変の行動力」「思考力・判断力」の各21%となった(図3)。

また、(2)「教職実践演習」における具体的な実践目標では、第1位が「思考力・判断力の向上」で29%、第2位が「法律等の理解・知識の向上」「コミュニケーション力の向上・積極的交流」「実務実践能力の向上」「事前準備の充実」の4項目で、同率の21%であった(図4)。この具体的な実践目標は、(1)の向上すべき資質能力を踏まえながら、一人一人が特色ある課題設定を行ったが、課題の種類は(1)より分散した。

2. 最終授業後のアンケートによる学生の自己評価の分析結果

1)「教職実践演習」における授業目標および具体的な実践目標についての達成状況

「教職実践演習」においては、V.で述べたように3つの授業目標を設定した。また、学生は自らの資質能力を向上させるための具体的な実践目標

を設定した。これら目標について、最終授業後のアンケートで学生が自己評価した結果を図5に示した。

図中Q1.1~Q1.3の3つの授業目標については、自己評価の平均値が4.14~4.00で、概ね達成できたとの結果となった。3つの授業目標のうち、目標1と目標2の評価平均値は、4.14と同じ値だが、目標3では4.00と若干低い。また、評価平均値が同じ目標1と目標2の評価者の内訳は、目標1は評価4(やや十分に達成)が43%なのに対し、目標2は評価5(十分達成)が43%であった。目標3では、評価5と評価3が同じ43%であった。

図中Q2の具体的な実践目標の達成状況については、自己評価の平均値は3.79と、目標1~3に比べ0.21以上低かった。評価者の内訳は評価3(普通)が43%、評価4が36%、評価5が21%であり、評価3とした者が最も多かったのが原因であった。評価3の記述としては、

- ・知識も実践力も受動的な部分があったから。
- ・臨機応変に動くよう心掛けているが、その行動が的確かどうか悩むため。
- ・振り返ると、もっと積極的に行動できたと感じるため、などであった。

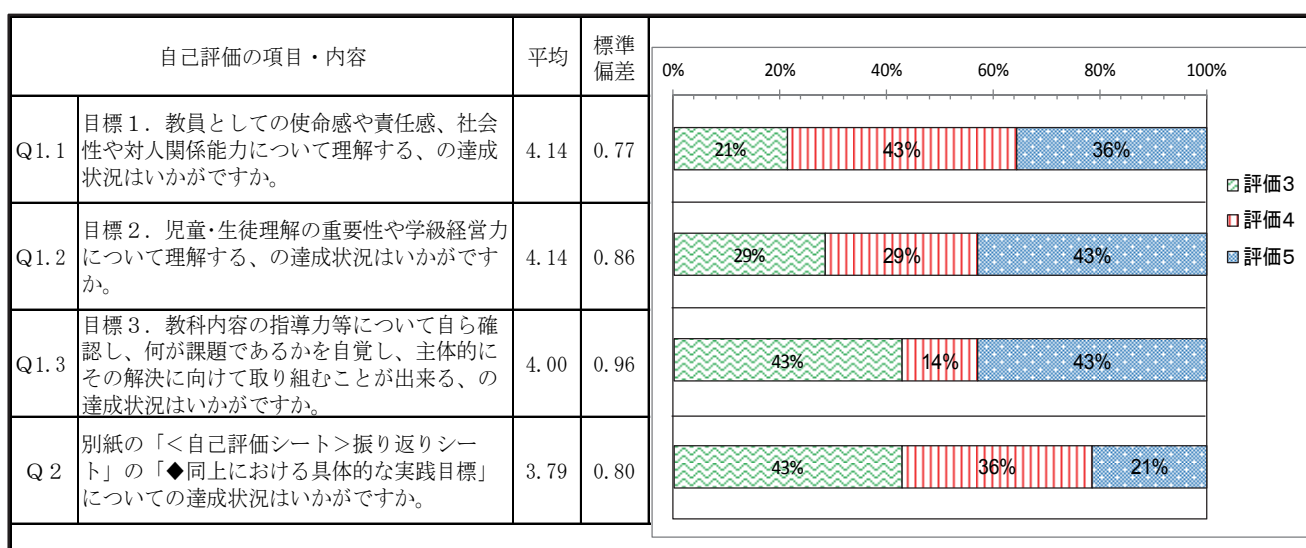


図5. 「教職実践演習」の授業目標および具体的な実践目標についての自己評価結果 (n=14)

※ 評価は5件法(評価基準 1:不十分、2:やや不十分、3:普通、4:やや十分に達成、5:十分達成)による。

2) 「教職実践演習」を通して教員としての資質能力向上に役立ったこと

最終授業後のアンケートでは、学生にとって、どんな事が本授業を通して教員としての資質能力向上に役立ったと感じているかを質問した。カテゴリ分析した結果を図6に示す。

図6では、「グループワークで他の人の意見や良い点を学べたこと」が第1位の36%、「食物フェアなど人前で話す機会が多かったこと」と「現役先生の話を聞き意識が高まったこと」が、第2位の21%であった。学生の受け止め方は個人差が大きいですが、本授業で実施した様々な内容が、教員としての資質能力向上に役立っていると学生が実感した結果となった。

3. 「履修カルテ」の自己評価結果と最終授業後のアンケートによる「履修カルテ」の効果

1) 「履修カルテ」の自己評価結果の変化

本学の「履修カルテ」では2年次から自己評価

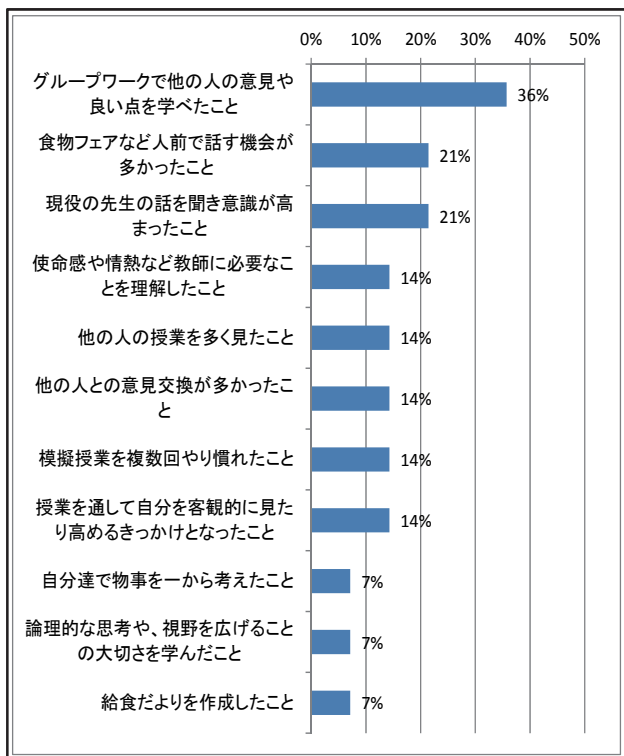


図6. 「教職実践演習」を通して教員としての資質能力向上に役立ったこと (n=14)

※ 記載内容からカテゴリ化 (複数回答)

をさせているが、14名全員のデータが揃っていたのは3年次11月から3回であった。この3回について、自己評価の7つの大項目における評価結果と評価時期の関係を表6に示した。

(1)~(7)の大項目すべてにおいて、3年次11月と4年次7月の間で評価平均値が高くなり、4年次7月と4年次1月の間では、評価平均値がほとんど変化しなかった。そして、3年次11月と4年次7月の間では、7項目の平均値が+0.82となった。この期間において、大項目別に変化量の大きい順で見ると、(1)学校教育についての理解 (+1.17)、(2)子どもについての理解 (+1.07)、(5)教科・教育課程に関する基礎知識・技能 (+0.97)の順となった。

2) 最終授業後のアンケートによる「履修カルテ」の効果

学生が1年次から作成し活用したと思われる「履修カルテ」について、その効果をどのように考えているかを、最終授業後のアンケートで調査した。調査は、筆者が7つの項目を設定して該当するものを複数回答で選択させる方法で行った。そ

表6. 「履修カルテ」自己評価の大項目における評価時期と評価平均値の関係 (n=14)

「履修カルテ」自己評価の大項目	自己評価の時期			
	3年次11月	4年次7月	4年次1月	
(1) 学校教育についての理解	平均値	2.12	3.29	3.26
	標準偏差	0.61	0.57	0.59
(2) 子どもについての理解	平均値	2.17	3.24	3.24
	標準偏差	0.61	0.53	0.53
(3) 他者との協力	平均値	3.66	4.16	4.19
	標準偏差	0.79	0.68	0.67
(4) コミュニケーション	平均値	3.54	4.05	4.05
	標準偏差	0.51	0.63	0.63
(5) 教科・教育課程に関する基礎知識・技能	平均値	2.35	3.32	3.32
	標準偏差	0.64	0.53	0.53
(6) 教育実践	平均値	2.97	3.78	3.80
	標準偏差	0.41	0.51	0.50
(7) 課題探求	平均値	3.46	4.14	4.18
	標準偏差	0.87	0.69	0.72
7項目の平均値	平均値	2.89	3.71	3.72
	標準偏差	0.45	0.46	0.47

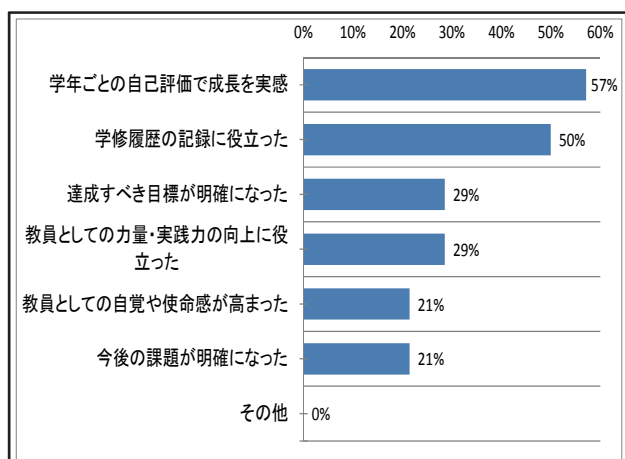


図7. 学生による「履修カルテ」の作成・活用の効果 (n=14、複数回答)

の結果を図7に示した。

回答の多い順に、「学年ごとの自己評価で成長を実感」が57%の第1位、「学修履歴の記録に役立った」が50%の第2位、「達成すべき目標が明確になった」「教員としての力量・実践力の向上に役立った」がそれぞれ29%の第3位であった。

VIII. 考察

上記の結果を踏まえ、設定した3項目の研究課題に考察を加えた。

1. 「教職実践演習」は、授業の目標を達成しており、学生にとって、教員としての資質能力向上に役立ったか

本授業において、V. で示した3つの授業目標を達成しているかであるが、これらの学生による自己評価の平均値が4.14~4.00であったことから、これら目標は概ね達成したと評価した(図5)。それらを分析してみると、目標1の「教員としての使命感や責任感、社会性や対人関係能力について理解する」では、評価5(十分達成)と評価4(やや十分に達成)の合計が79%で評価平均値は4.14であった。目標2の「児童・生徒理解の重要性や学級経営力について理解する」も評価平均値は4.14であるが、評価5(十分達成)と評価4(やや十分に達成)の合計は71%であった。一方、目

標3の「教科内容の指導力等について自ら確認し、何が課題であるかを自覚し、主体的にその解決に向けて取り組むことが出来る」では、評価平均値は4.00であり、評価5(十分達成)と評価4(やや十分に達成)の合計が57%と、目標1・2より低い値となった。これは、目標1・2が、「理解する」という知識レベルの目標であるのに対し、目標3は、「主体的にその解決に向けて取り組むことが出来る」という「行動」を伴う自己効力感を問う目標となっており、その違いが主な原因であると考えた。現場経験に乏しい学生が、行動力を高めて自己効力感が得られるようになるためには、さらなる授業の工夫・改善が求められている。

次に、本授業は、教員としての資質能力向上に役立ったかであるが、役立ったと評価した。その理由は3点ある。まず、本授業の目標1~3に教員として必要な資質能力向上の要素を含めており、それらの目標を概ね達成したこと。次に表3や表4で示したように、表1にある「教員として求められる4つの事項」や、表2に示した表1を達成するための具体的な内容・方法等を含んだ授業を実施したこと。さらに、図6で示した「教職実践演習」を通して教員としての資質能力向上に役立ったことに、学生全員が肯定的・具体的に回答したことである。しかし、どの程度役立ったかの定量的なデータは今回測定しておらず、この測定方法が今後の課題となっている。

2. 「履修カルテ」の作成は、学生にとって、教員としての資質能力向上に役立ったか

「履修カルテ」の作成・活用が、「教員としての力量・実践力の向上に役立った」と回答した学生は、29%であった(図7)。学生が考えた「履修カルテ」の作成・活用の効果については、「学年ごとの自己評価で成長を実感」が57%の第1位、「学修履歴の記録に役立った」が50%の第2位であった。教員の資質能力に関係が深い項目である「教員としての力量・実践力の向上に役立った」が

29%の第3位、「教員としての自覚や使命感が高まった」が21%の第5位と予想より低い値となった。このことは、教員としての資質能力向上という視点よりは、むしろ「履修カルテ」の記録性から派生する学生の思いが結果に反映されたと推定した。

3. 「履修カルテ」を「教職実践演習」で活用することは、学生にとって、教員としての資質能力向上に効果的であるか

「履修カルテ」を「教職実践演習」で活用することは、教員の資質能力向上に効果的であるかであるが、効果的であると評価した。その理由は、考案した「履修カルテ」の振り返りシート（図1）が、これまで教職課程で学んだ理論と実践の有機的な統合を図るための前提条件としての、それまでの学びの振り返り・省察の手助けをしたことや、学生自身の教員としての課題の明確化と、それを克服するための具体的な実践目標決定を促す有効なツールとして機能したことの2点による。ただし、2. で前述したように、学生による「履修カルテ」の作成・活用の効果について、「教員としての力量・実践力の向上に役立った」が29%、「教員としての自覚や使命感が高まった」が21%と低く回答した点（図7）や、具体的な実践目標の達成度が、評価5（十分達成）と評価4（やや十分に達成）と合わせて59%であった（図5）ことに対する指導上の課題は残った。しかし、「履修カルテ」の活用が、本授業の効果を高めた事実は変わらないと考えている。

また、この「履修カルテ」を「教職実践演習」で活用した効果については、「履修カルテ」の振り返りシートを活用して記入した向上すべき資質能力（図3）」と、本授業を通して資質能力向上に役立ったこと（図6）の関係性が高かったことから示された。具体的には、授業の3回目で、学生が向上すべき資質能力（図3）として挙げた3位までの「他者とのコミュニケーション力」「授業展

開力・指導力」「臨機応変の行動力」と、授業の最終回に学生全員が答えた、資質能力向上に役立ったこと（図6）で挙げた3位までの「グループワークで他の人の意見や良い点を学べたこと」「食物フェアなど人前で話す機会が多かったこと」「現役先生の話を聞き意識が高まったこと」などが強く関係していた。このことから、教員としての資質能力である「コミュニケーション能力」「授業展開力」「使命感・責任感」「実務能力」などを「履修カルテ」の活用や本授業の実践を通して高めたことが示唆されると考えた。

IX. まとめ

本研究では、T大学栄養学科・教職課程における「教職実践演習（栄養教諭）」の実践と「履修カルテ」活用の効果について、実践内容を示しながら、2016年度の実践を中心に検証した。

本授業における3つの授業目標の達成度は、学生による自己評価の平均値が4.14～4.00（5件法）であり、これらの目標は概ね達成したと評価した（図5）。

次に、本授業が教員としての資質能力向上に役立ったかについては、対象者全員が、授業で役立った項目を具体的に回答したことなどから、効果があったと評価した。

また、学生の回答による「履修カルテ」を作成した効果については、「教員としての力量・実践力の向上に役立った」が29%の第3位であった（図7）。最も多かったのが「学年ごとの自己評価で成長を実感」で57%の第1位、「学修履歴の記録に役立った」が50%の第2位であり、学生は「履修カルテ」の効果について、記録性に注目して回答する傾向が見られた。

さらに、「履修カルテ」を本授業で活用する効果であるが、「履修カルテ」の振り返りシートは、学びの振り返り・省察の手助けをすることや、学生自身の教員としての課題の明確化と、それを克服

するための具体的な実践（行動）目標決定の有効なツールとして効果的であった。

X. 今後の課題

今後の課題としては、3点ある。1点目は、学生の行動力と自己効力感を高めるための授業改善である。考察でも述べたが、授業目標3の「教科内容の指導力等について自ら確認し、何が課題であるかを自覚し、主体的にその解決に向けて取り組むことが出来る」では、評価平均値は4.00であるものの、評価3（普通）と回答した者が43%であった。この理由としては、行動しても不安感を抱いたり、消極的な気持ちが原因であったりするので、これらを少しでも払拭し自信につなげる指導が必要と考えている。

2点目は、表6で示した「履修カルテ」自己評価の大項目における評価時期と評価平均の関係において、4年次7月から4年次1月において評価点の伸長が見られなかったことの原因究明である。授業最終回のまとめの中で、評価シートに赤字で書き込むよう指示して得た結果であることから、学生の時間的な余裕のなさが、7月と同様な評価となった可能性はある。このことも含め、本研究では、学生のデータ数が不足している反省もあり、数年間のデータを蓄積した上での検証も今後必要と考えている。

3点目は、「教職実践演習」が、教員としての資質向上にどの程度効果を上げているかの定量的な測定方法の開発が必要なことである。「教育職員免許法施行規則」（2008年11月改正）においては、「教員として必要な知識技能を修得したことを確認するものとする」と明示されていることから、何を絶対的な基準として学生を評価するかという問題は残る。教職課程の質保証を担保する意味でも「教育実践演習」の評価の在り方は、今後とも本学のみならず各大学における大きな課題の一つであり、実証的な研究の蓄積が重要と考える。

謝辞

本研究に参加を承諾した2016年度の「教職実践演習（栄養教諭）」全受講者14名の皆様と、データ使用を快く承諾いただいた本学の教職課程委員会に厚くお礼申し上げる。

引用文献

- 1) 中央教育審議会：今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）「1. 教職課程の質的水準の向上」, 2006.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337006.htm
(2015.1.16 閲覧)
- 2) 中央教育審議会：今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）「別添1 教職実践演習（仮称）について」, 2006.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1337016.htm
(2015.1.16 閲覧)
- 3) 課程認定委員会・文部科学省：教職実践演習の実施に当たっての留意事項, 2008.
(「教職課程申請の手引き及び提出書類の様式等について 参考1より」)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/12/19/1267643_7.pdf (2017.4.25 閲覧)
- 4) 課程認定委員会・文部科学省：「履修カルテについて」, 2008.
(「教職課程申請の手引き及び提出書類の様式等について 参考2より」)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/12/19/1267643_8.pdf (2017.4.25 閲覧)
- 5) 新井英志：インターネット検索調査を利用した履修カルテの現状分析－文部科学省の例示との比較を中心として－, 天使大学紀要,

- 17(1), 13-26, 2016.
- 6) 長谷川哲也：「教職実践演習」の成果と課題に関する検討：静岡大学教育学部における2013年度の取り組みを通じて，静岡大学教育学部研究報告．人文・社会・自然科学篇，65，151-164，2015.
 - 7) 國原幸一郎：実践的指導力習得に向けた「教職実践演習」の視座，名古屋学院大学論集．社会科学篇，53(1)，103-139，2016.
 - 8) 梅津徹郎，近藤健一郎：教職必修科目「教職実践演習」の取り組みをふりかえって，北海道大学教職課程年報，4，1-14，2014.
 - 9) 中島夏子他：東北工業大学における履修カルテとその活用事例，東北工業大学紀要 II 人文社会科学編，34，47-57，2014.
 - 10) 川村学園女子大学：「履修カルテ」を活用した履修学生への指導－教職ガイダンスから教育実習演習（事前・事後指導）・教職実践演習まで－，私立大学の特色ある教職課程事例集 II，47-50，2015.
 - 11) 笹原豊造他：教職実践演習授業報告（中・高，栄養教諭部会），広島文教女子大学教職センター年報，2，75-79，2014.
 - 12) 中島千恵他：短大における教職実践演習（栄養教諭）の取組と効果，京都文教短期大学研究紀要，53，149-160，2015.
 - 13) 木村亜希子他：栄養教諭としての実践的指導力を確実に身につけさせるための取り組みについて：「到達目標の作成」及びその「成績評価の方法」を通じて，青森中央短期大学研究紀要，28，19-33，2015.